

## かわいい七つの子

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

「からす、なぜなくの、からすは山に、かわいい七つの子があるからよ」というのは大変有名な『七つの子』という童謡の歌詞で、作詞は野口雨情、作曲は本居長世である。七つの子というのが七羽なのか七歳なのかはわからないが細かな解釈はさておき、子供のころから何度も口ずさんだ曲である。今回は鳥の話。あえて、とかく嫌われがちな鳥を選んだのは次のような事情による。

筆者の住む集合住宅は2棟からなるが、棟間に小ぶりの広場があり、比較的大きな楠木がいまどきなら豊かな葉を蓄えて立っている。そこに鳥の巣があったことはのちに気が付くのではあるが、その木の下付近に2羽のカラスの赤ん坊というより幼児がうろうろしていたのである。羽を拡げてばたばたやるがおよそ飛べそうにない。成長した鳥の羽は「鳥の濡れ羽色」というくらい艶のあるきれいなものであるのが、まだ産毛のような白いものが混じっていた。



先にも書いたように好きな人は少ないのかもしれないが、筆者もどうも鳥が嫌いである。本来なら山で生活しているはずであるが、街では生活ごみをあさってあたり一面散らかしてくれる。筆者の集合住宅では蓋つきのコンテナにごみを投棄するようにしているので今まで大きな被害はないが、ごみ袋を直置きしている場合には何らかの対応をとらないと悲惨なことになる。

さてその2羽の子供であるが、数日間は共に行動していたが、どうやら成長に差があったようで、1羽がどこかに行ってみ当たらなくなった。残された方は周囲の植え込みの中でガーガーと騒がしい。おそらく親を呼んでいるのだろう。しばらくすると親鳥がやってきて餌を与える。姿の見えなかったもう一方の子供もまだ飛べるようにはなっていなかったのか、別のところでやはりガーガーと鳴いていた。妙なもので、嫌いなはずなのに巣から勢い余って早期に出てしまったと思われる子鳥の状況はやたら気になるのである。

筆者が現在勤務する大学のキャンパスは楠木、桜など多くの木々に囲まれ、今頃は緑も鮮やかで非常に気持ちがいい。しかし食堂などの残飯や散らかったごみなど漁ってか、多数の鳥が生息している。野鳥なので退治はできないのか、定

期的に鷹匠がやってきて群れている鳥を追い払っている。しかし鷹がいる間は別の場所に避難して、鷹がいなくなるとまた戻ってくる。頭がいいのは認めざるをえない。ビニール袋などに食品をいれて歩いていた学生が襲われるといったトラブルも時々聞く。ただの1羽ならともかく集団でやってこられたら大変なことになりそうだ。実際、たくさんの鳥がとまっている付近を歩くのはかなり抵抗がある。何かのはずみになかの1羽が食べ物にありついたらとすれば、それを見習って他も同じような行動をとることだろう。集団では学習がかなり効果的に行われるようであるから。テレビのニュースで鳥に後頭部をつつかれたとかレジ袋にアタックされたとか、そのような被害を多く耳にするが、鳥は雑食でなんでも食べるとはいえ、本来は人を攻撃する性質ではないと思われる。現状は、日常的に生ごみが放置されていたとか、鳥が容易に食事に見つける状況があった結果であろう。

よくよく考えれば、都市であっても先住は鳥や野鳥、猪、狸などであり、そこに人間が侵入してきたのである。先住権を主張されたならば我々人間に分はなく、人間が出ていかないとすれば、何とかして共生を図る以外に方法はない。都市部においてはコンテナなどを利用して鳥が容易にアクセスできない工夫などは必須であろう。公園においては弁当カスなどごみを残さないことが必要である。街中にも緑を増やし、セントラルパークやハイドパークまでとは言わないが、様々な小動物も生息しやすい状況を造れば、何年かののちに鳥の生息数は餌の量にバランスするようになるに違いない。そのような自然との共生が可能な状況の構築は、あくまでもあとから侵入した我々の方の責任でありそうだ。

あれから約1か月。例の子鳥は羽に白いところはまだ多少残っているものの、親鳥とともに筆者の住む集合住宅の周りを自由に飛び回っている。濡れ羽色になるにはまだ少々時間がかかることだろう。